九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古代ヘブライ語構文法の特徴

松田，伊作

https://doi.org/10.15017/2332729

出版情報：文學研究. 72, pp.109-124, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

古代ヘブライ語構文法の特徴

松　田　伊　作

旧約聖書ルツ記を資料として，そのヘブライ語 syntax の特徴をいくつか明らかにしようとするのが小論の目的である．ある言語の特徴というとき，それは他の言語との対比によって浮び出てくる独自性を意味するものであるから，ここでもわれわれの母語である日本語の文法と絶えず対照させながら論を進めてゆきたい．(1) もっともわれわれは日本語については文法的か否かを判断することが可成りの程度までできるけれども，古代ヘブライ語については所与の文献の中に現れているか否かが云々できるだけであって，文法性の問題は結局は推論にすぎない．この小論では資料をルツ記というごく限られた範囲に限定したけれども，以下に述べる特徴は少くとも旧約ヘブライ語の散文形式にはすべて妥当する筈である．ルツ記を選んだのは，これが旧約聖書66巻の中で最も短くはあるけれども一つの完結した作品であるという理由の他に，その言語が，ヤハヴィスト資料やダビデ王位継承史におけるそれと並んで，古典ヘブライ語物語文の典型とされており，(2) さらには説明文と会話文が適当に交錯していて両者の文型の相違を見るのにも好適だと思われたからである．ちなみに本書の成立年代については，学説がまちまちであるけれども，紀元前5－4世紀とするのが一番妥当であろう．(3)

さて Schlesinger (1953)(4) は，ヘブライ語スィンタクスにおいて語順が重要であるにもかかわらず，彼以前においてはこれが殆んど扱われなか

ったということを正当にも指摘して，ヘブライ語動詞文の語順の問題と取り組み，アラビア文法家に従って動詞—名詞という型をその正常の形であるとしてきた従来の説に対し，動詞が若干の例外はあるけれども文中第二番目の位置を占めるという規則を立てた．名詞の前におかれた文頭の wə は文と文の間に位置するものだから文の第一部分とは認められないが，いわゆる consecutivum の wa/wə は次の動詞と切り離して単独で文の第一部分とすべきだ，というようないささか牽強付会の説を一応認めるとしても，動詞が文中の第二番目の位置——これは上述のことからも分かるように，主部と述部との関係というような統辞機能上の位置をいうのではなく，まったく機械的な，順番を指す——に立つというようなことをいくら指摘してみたところで，ヘブライ語動詞文の語順における本質的な点には少しも迫るものでない．

ヘブライ語だけでなく古代セム諸語の構文において最も基礎的な特徴は，すでに井筒俊彦氏（1939）[5] も明快に指摘したように，régressivité ということである．すなわち氏の言葉を借りれば，「先ず最初に表現せんとする思想の中心をなす idée を出し，それに続けて次第にこの中心的観念を modifier し expliquer して行くやり方である」[6]．これに対し日本語の文構造の特徴は progressivité である．つまり語順について見ると，ヘブライ語と日本語とは正反対な構造をとる．われわれのテクストから例をあげると，

watteelaknaah badderek laašuwb 'el 'ereṣ jəhuwdaah（1：7）

という文を，末尾の語から順々に日本語に逐語訳してゆくと，

ユダノ地ニ戻ルタメニ道ヲ彼女ラハ行ッタ

となるが，これは日本語として文法的な文である．生成文法の用語でいえば，日本語が「左枝分れ」的言語である[7] のに対し，古代ヘブライ語は「右枝分れ」的言語だ，ということになるであろう．以下にこの「右枝分れ」的な現象をいくつかの文法規則において見て行こう．これらは何れも例外を許さない規則である．言い換ればこれらにおいて語順を取り替える

と別の意味の形式ないし非文法的な形式になると推定される。

1．名詞句の構造　いくつかの名詞句を wə でつないだ

hu' wə'ištow wušnej baanajw ≪彼と彼の妻と彼の二人の息子≫（1：1）

qəṣijr haśśə'owrijm wuqəṣijr haḥiṭṭijm ≪大麦の刈入れと小麦の刈入れ≫（2：23）

のような「多分枝構文」以外の名詞句はすべて regressive である．ついでながら総じてヘブライ語の多分枝構文では，接続詞wə等を英語の and 等のように最後の一つだけ残してあとは省略するということができない．

a．属格結合　AのB，A's B とか B of Aというときヘブライ語では B-A という形に結合され，どの言語でも単語合成に際して起こるように，結合体全部が一語のように発音される結果，Bは status constructus（構成形）と呼ばれる短縮形をとることになる．ちなみに通時的に考察すれば，Aはアラビア語等におけると同じく本来は属格の接尾辞を伴なっていたと推定される．

śədeh mow'aab ≪モアブの野≫（1：1）

šeem haa'ijš ≪その人の名≫（1：2）

təḥillat qəṣijr śə'oorijm≪大麦の刈入れの始まり≫（1：22）等．

b．形容詞による修飾　これは英語でも日本語と同じく表面上は progressive の形をとるが，ヘブライ語では必ず形容詞が名詞に後置される。

naašijm moo'abijjowt ≪Moabite women≫[8]（1：4）

śaadeh 'aḥeer ≪another field≫（2：22）

ḥasdeek haa'aḥarown ≪this last proof of your loyalty≫（3：10）

goo'eel qaarowb mimmennij ≪a kinsman even closer than I≫（3：12）

指示代名詞による修飾も同様：

šeeš haśśə'oorijm haa'eelleh ≪these six measures of barley≫（3：17）

hanna'araah hazzo't ≪this girl≫(4：12)

c．同格（apposition） 文法的機能を等しくする単語又は句を並置することによって，最初の単語又は句を後続の形式が敷衍・説明する構文．これは日本語とはやはり語順が逆であるが，英語等とは同じである．ただヘブライ語では，いわゆる copula の介在なしに同格構文がそのままの形で，(名詞) 文に該当し得るという点が，英語とも日本語とも異なる．つまり同格構文がより大きな文の成分であるときには句に相当し，そうでないときには文に相当する．A，Bという二項から成る同格構造は，その基底にある「AハBダ」という判断をも同時に表出しているわけで，これはヘブライ語文構造上の重要な特徴の一つである．bにあげた形容詞と名詞との結合も本質的には同格構文と見なすことができる．例えば上にあげた naašijm moo'abijjot は ≪Moabite women≫ だけでなく，≪(The) women are Moabites≫ でも，また ≪(the) women, (the) Moabites≫ でもあり得るのである．以下には同格と見られる名詞句をあげる：

šənejhem maḥlown wəkiljown ≪彼ら二人，すなわちマロンとキリオン≫（1：5），

mowda' lə'ijšaaha 'ijš gibbowr ḥajil mimmišpaḥat 'elijmelek ≪a kinsman on her husband' side, a well-to-do man of the family of Elimelech≫(2：1)

jahweh 'eloohej jiśraa'eel≪イスラエルの神ヤハウェ≫（2：12），

ruwt hammow'abijjaah ≪モアブ女ルツ≫（2：21），

ruwt kallaataaha ≪彼女の嫁ルツ≫（2：22），

ruwt hammow'abijjaah 'eešet hammeet ≪死んだ男の妻，モアブ女のルツ≫（4：5），等．

d．前置詞句との結合 英語のA in B等と同じ構造をもつ．前置詞自体がその名称のとおり常にすぐ後の名詞と結合し，こうして出来た前置詞句は動詞と統合すれば動詞句を，名詞（句）と結合すれば名詞句を構成する．後で見るように動詞との統合の際にも圧倒的多数がそうであるが，名

詞（句）と統合して名詞句を構成する時は必らず，その後に付く．

ḥelqat haśśaadeh *ləboo*ʿaz ≪ボアズの畑の一部≫（2：3），

qaarowb *laa*nuw ≪我々に近い者≫（2：20），

ʿaśaaraah ʾanaašijm *miz*ziqnej haaʿijr≪その町の長老に属する十人≫（4：2）

hattəʿuwdaah *bə*jiśraaʾeel ≪イスラエルにおける証明≫（4：7）

e．関係詞節　ここにこれをあげるのは，関係詞 ʾašer はそれに直接後続する文を主文の中に埋込むと共に，関係詞節全体が主文の中では名詞句として機能することになるからである．ʾašer は先行詞を取る場合と取らない場合（英語の what 参照）とがあり，後者はルツ記においては前置詞と結合して前置詞句を構成するか，ʾet と結合して目的格の名詞句を構成するかの何れかであるから，この場合の関係詞節が名詞句に該当することは明白であるが，前者すなわち先行詞をとる場合にも，関係詞節は先行詞たる名詞の意味を説明または限定するのであるから，関係詞節全体が名詞句化されて，先行詞と同格の関係に立ちつつ，先行詞と共により大きな名詞句を構成する，と見ることができる．一般的にいって，先行詞を取らない関係詞節が不定代名詞的な意味を表わすことになるのは当然であろう．次の2例を比較：

hammaaqowm *ʾašer* haajətaah šaammaah ≪彼女がいた（例の）場所≫（1：7）

ʾel *ʾašer* teeləkij… ≪あなたが行くところ（なら何処でも，そこ）に…≫（1：16）

いずれにせよ，ヘブライ語では関係詞節も，日本語におけるとは全く逆の方向を向いていることは明らかである．上掲の他，先行詞を取る箇所は，2：3，9，11(2×)，12，19，20，21(2×) 3：1，2，4，5，15，16 4：1，3，9(2×)，11(2×)，12(2×)，14，15

先行詞を取らない ʾašer で前置詞に続くものは，1：8，13，16，17，2：2，9　3：18；

'et に続くものは，2：17，18(2×)，19　3：4

2．接続詞の位置　1a でも扱った並列接続詞の wə は，直後の音に同化されて形態音韻論的交替を行うことからも分かるように，その前の形式とではなく，後に来る形式と続けて発音される．この点英語の and と同じく，日本語の助詞とは正反対である．従属接続詞の 'im ≪…ナラ≫，ləbiltij ≪…シナイタメニ≫，pen ≪…シナイヨウ≫ についても同様である．各1例ずつあげておく：

'im tig'al, gə'aal ≪If you are going to do your duty as next-of-kin, then do so≫ (4：4)

halow' ṣiwwijtij 'et hannə'aarijm *ləbiltij* nog'eek ≪I have given them orders not to molest you≫(2：9)

lo' 'uwkal lig'ol lij, *pen* 'ašḥijt 'et naḥalaatij ≪I cannot act myself, for I should risk losing my own patrimony≫ (4：6)

3．否定辞，疑問辞，強勢辞の位置　これらはヘブライ語では何れも文頭又はその近くに現れ，日本語のこれらに相当する助詞が文末又はその近くに現れるのとは完全に対照的である．

a．否定辞　*'al* tipgə'ij bij ≪私に強制するな≫ (1：16) 等．

wə*loo'* jikkaareet šeem hammeet…… ≪死んだ者の名が…絶ち切られないように…≫ (4：10)

b．疑問辞　*ha*zo't no'omij ≪これがナオミか？≫ (1：19)

否定詞 low' と結合すれば ha-low' ≪ナイカ？≫となり，この順序も日本語と逆である：

halow' šaama't bittij ≪娘よ，聞かなかったか→よくお聞きなさい≫ (2：8)

疑問代名詞も文頭または節頭に立つ：

laammaah tiqre'naah lij no'omij ≪なぜ私に向ってナオミと呼ぶの

です≫（1：21）

ləmij hanna'araah hazzo't ≪この少女は誰のものか≫（2：5）

madduwa' maaṣaatij ḥeen bə'ejnejkaa…≪何故私はあなたの目に恩恵を得たのか≫（2：10）

'eepoh liqqaṭt hajjowm ≪あなたは今日は何処で拾いましたか≫（2：19）

wə*'aanaah* 'aaśijt ≪あなたが働いたのはどちらか≫（2：19）

これらの「疑問辞」は，日本語では文末に近く移動させて，例えば「…呼ブノハ何故カ」のようにすることもできるが，ヘブライ語では文（節）頭以外に現れる例がない。

c．強勢辞 (i) kij は *kij* šaamə 'aah……*kij* paaqad jahweh 'et 'ammow（1：6）

のような文では前後関係から，最初のは「理由」を表わし，二番目のは副文を導くための，接続詞として ≪*because* she had heard…… *that* the Lord had cared for his people≫ のようにも訳されるのであるが，

kij 'el 'ašer teeləkij 'eeleek（1：16）

のような文では，論理的関係をその前文との間に見出すことが困難なので，emphatic particle だと言われる．何れにせよ a，b で扱った他の particles と同じく，この kij も文の中ではその右側の要素を支配するのである．日本語との構造上の対比を考えて上の1：16の文を訳せば，

≪あなたが行く所なら何処へでも参りますよ≫

とでもなろうか．

(ii) gam 文脈に応じて also とか even とか yet などと訳されるこの小辞は，やはり強勢辞の一つと考えることができる．常に強調されるべき形式の前に現れる点，kij と同じである．日本語のモと意味も統辞機能もよく似ている．ただしモはその左側の形式と統合する．

wajjaamuwtuw *gam* šəneejhem…≪この二人もまた死んだ≫（1：5）

gam haajijtij hallajlaah lə'ijš …≪今夜男のものとなったとしても≫

(1：12)

wə*gam* lo' ta'abuwrij mizzeh≪ここから去ってもいけない≫(2：8)

gam kij 'aamar 'eelaj…≪私に…とも言いましたよ≫(2：21)

この項で取上げた否定・疑問・強勢を表わす particles は，表現された事柄に対する表現者の態度を表わす，いわゆる modus 的意味要素を含んだ形式であって，これが日本語ではいずれも文または節の末尾かその近くに現れるのに対し，ヘブライ語では文頭か又はその近くに現れるのである．この事実は，次に挙げる動詞文における述語の位置とも関連して，ヘブライ語文構造上の大きな特徴をなしているのである．

以上，名詞句の構造と文における小辞（particles）の位置とについて，例外なく régressivité の原則が働いているのを見た．次に，文を直接構成する成分の配列を調べ，ここでも外見上の不統一にもかかわらず根本的な原則は動かないことを確かめよう．

4．動詞文における動詞の位置　旧約ヘブライ語の定動詞は，「完了形（接尾形）」と「未完了形（接頭形）」とがあって，何れも動作主体の数・人称・性に応じて活用する．さらに動作の客体をも接尾代名詞によって表す．例えば hešijbanij ≪帰シタ―彼ガ―私ヲ≫（1：21）では，これだけで「動作―主体―目的」という構造を持っており，事実この一語が単独で文を形成することもできるのである．そして二語以上から成る動詞文では，既に動詞において表現された動作なり主体なり，あるいは目的なりを，さらに補足説明したり限定するための形式が加わっているのであって，動詞以外の成分はいわば動詞という predicate に対する complement の機能を果しているに過ぎない．そしてそれが動作に対するものであるときには副詞(句)，主体に対するときには主語，目的に対するものは目的語と呼ばれるのである．もっとも主体は常に動詞接辞によって示されるが，目的は自立形式によって明示される場合には接辞としては出て来ないことが多い．こうして例えば上掲の文に「主語」を補って hešijbanij jahweh≪私

を帰した，ヤハウェが≫となり，さらに「目的語」を限定して，hešijbanij jahweh reejqaam ≪私を帰した，ヤハウェが，空しい者として≫となる．ところで所与のテクストでは，reejqaam hešijbanij jahweh（1：21）と，「目的語」の reejqaam が動詞に先行している．これは，この文の表現者にとって一番強調したいことが，この≪空しい者（として）≫という概念であるからである．以下に見るように，動詞文において，動詞がその目的語，主語，副詞句等に先行する例が圧倒的に多いのであるが，それは動詞の意味上の特性が然らしめているにすぎない．これは日本語の普通の文において動詞が文末に近い位置を占めるのと相応ずる現象であるといえよう．

ルツ記の動詞文において，上述の接続詞[9]・否定辞・疑問辞・強勢辞以外の要素が，述語たる定動詞に先行する場合と，定動詞が先行する場合とを数えて見ると，まず説明文（会話以外の地の文）では，動詞先行型が1：1の冒頭の wajhij を始めとして約140例ある[10]．これに対し，動詞非先行型は12例あり，その内9例は，4：18—22の

peres howlijd 'et ḥeṣrown, wə*hesrown* howlijd 'et raam,… ≪ペレスがヘスロンの父となった．そしてヘスロンがラームの父となった．…≫

という系図に出るものである．この系図は歴代史上2：5，9—15に対応し，そこからの転書とされる．同じ名前が尻取り式に続くように作られた定型的な系図文体であって，目下の考察からは外すべきものであろう．けれども序で乍らこのような様式が系図の文体として定着したのは，系図において重要なのは人の名前とその親子関係であって，文頭に父が，文末に子が現れるのが系図の目的に一番ふさわしいからなのだ，と思われる．

さて残りの3例について見ると，

wattiššaq 'orpaah laḥamowtaaha wə*ruwt* daabəqaah baaha ≪オルパはしゅうとめに接吻し（て故郷に帰っ）たが，ルツは彼女につき従った≫（1：14）

では，前文の主語オルパの態度に対して，ルツのそれを強調するため，

ruwt を先行させているのである．wajhij ḥebel row'eeh ṣown wə*qajin* haajaah 'owbeed 'adaamaah ≪アベルは群を飼っていたが，カインは土地を耕やしていた≫（創世記４：２）等を参照．

wu*boo'az* 'aalaah haššaʿar ≪ボアズは門の所へ上って行った≫（４：１）

この文における主語の先行――というより Rudolph によれば動詞の後置――を Rudolph は，Vorvergangenheit を表わすためとし，“Boas aber war zum Tor hinaufgestiegen……” と訳す[11]．Gerleman は訳文は Rudolph と同じであるが，その註で，この動詞を，das konstatierende perf. statt des kursiven *wjʿl bʿz*, weil die Handlung in den ununterbrochenen Strom des Geschehens nicht fällt; sie kann in Vergleich mit dem gerade Erzählten früher, gleichzeitig oder später sein. と言う．[12] 動詞の意味の解釈は Gerleman の方がより正しいであろう．しかし我々は，この文でも主語の先行の方を重視し，ここでルツを中心に進められて来た第３章までの話から転じて，ボアズを中心とする話題に変ったことが，この文頭の「ボアズは」によって示されている，と見たい．例えば wəhannaaḥaaš haajaah 'aaruwm ≪ところで蛇は……狡猾だった≫（創世記３：１），wəhaa'aadaam jaada'……≪さてその人は……知った≫（創世記４：１）等を参照．話題の転換にはしばしばこの手法が用いられるのである．

wə*heemmaah* baa'uw beejt leḥem ≪そして彼女たち[13] はベト・レヘムに入った≫（１：22）．この文で主語をわざわざ自立人称代名詞で先行させているのは，おそらく前文でナオミのみを主語として叙述し，ルツについては附随的に記したに過ぎなかったので，ベトレヘムに入ったのは一人ではなくて二人であったことを強調するためであろう．

次に会話文では，約80の動詞文のうち，約60例が動詞をその主語，目的語，副詞句等に先行させた動詞先行型である．例えば，

jaʿaś jahweh 'immaakem ḥesed ka'ašer 'aśijtem 'im hammeetijm

wə ʻimmaadij ≪貴女達が死んだ夫や私に対してしたように，ヤハウェが貴女達をお恵み下さるように≫（1：8）.

ただし，当然文頭に立つべき命令形はここに数えていない.

次に動詞非先行型，すなわち自立形式で表された主語，目的語，副詞句等が動詞に先行する型の文は次のようである：

a．副詞句の先行 kij ʻ*ittaak* naašuwb ləʻammeek ≪貴女と一緒に貴女の民に私達は帰りますよ≫（1：10）

ha*laahem*[14] təśabbeernaah……, ha*laahem* teeʻaageenaah：≪彼らのために……を貴女達は待つのか，彼らのために……を我慢するのか≫（1：13）

kij *'el 'ašer teeləkij* 'eeleek, wu*ba'ašer taalijnij* 'aalijn ≪貴女が行く所へ私は行き，貴女が宿る所に私は泊ります≫（1：16）

ba'ašer taamuwtij 'aamuwt wə*šaam* 'eqqaabeer ≪貴女が死ぬ所で私は死に，そこに私は埋められましょう≫（1：17）

ʻ*im hannəʻaarijm 'ašer lij* tidbaaqijn ≪うちの若者たちにくっついているがよい≫（2：21）

gam beejn haaʻomaarijm təlaqqeeṭ ≪束の間でも彼女に拾わせなさい≫（2：15）

koh jaʻaśeh jahweh lij wə*koh* jowsijp ≪かくヤハウェは私に為し，また重ねてかく為し給うように…≫（1：17）

wə*koh* tidbaaqijn ʻim naʻarootaaj ≪このように貴女はうちのむすめ達にくっついているがよい≫（2：8）

b．目的語の先行 *kol 'ašer to'mərij* 'eʻeśeh ≪貴女が仰有ることは何でも致します≫（3：5，11）

説明文では wattaʻaś kəkool 'ašer ṣiwwattaah ḥamowtaaha ≪彼女のしゆうとめが彼女に命じた通りに彼女はした≫（3：6）と，動詞先行型になる.

wə*gam 'et ruwt hammoo'abijjaah 'eešet mahlown* qaanijtij lij

lə'iššaah ≪マロンの妻だったモアブ女ルツをも私は買い取って妻とした≫（4：10）

šeeš haśśə'oorijm haa'eelleh naatan lij ≪この六杯の大麦を彼は私に下さった≫（3：17）

c．主語の先行 *kij hammaawet* japrijd beejnij wubeejneek ≪死だけが私と貴女とを分かつ≫（1：17）

wə*jahweh* 'aanaah bij, wə*šaddaj* heera' lij ≪ヤハウェが私に報復した，全能者が私に災を下した≫（1：21）

kij *kallaateek 'ašer 'aheebaatek* jəlaadattuw ≪貴女を愛している貴女の嫁がこれを生んだ≫（4：15）

wə'*aanookij* loo' 'ehjeh kə'aḥat šipḥootejkaa ≪私はあなたの奴隷女の一人にも及ばないのに≫（2：13）[15]

wa'*anij* 'aamartij ≪私は思った≫（4：4）

'*aanookij* 'eg'aal ≪私が眺います≫（4：4）

wə*huw'* jaggijd laak ≪彼は貴女に告げるだろう≫（3：4）

'*anij məlee'aah* haalaktij≪私は豊かな者として出て行った≫(1：21)

さて上述の通り，全体を通して見ると動詞先行型が圧倒的に多いけれども，このように説明文と会話文とに分けて調べて見ると，後者においては動詞非先行型の占める割合が前者におけるよりも可成り大きいことが分かる．しかしこれは予測できたことである．何故なら，出来事の客観的な描写を使命とする説明文では，modus 的要素の表出，すなわち表出されるべき事柄に対する表現者の主体的な関与を表面化することは，できるだけ抑えられる．そしてそこに置かれることによって modus 的色彩が付与される文頭又はその近くの位置に来るのは，動詞句に限られることになる．動詞句は，それ自体として dictum 的要素の強い名詞句に比べると，それ自体すでに modus 的要素をより多く持っているからである．いわば水と油の混合液を自然に放置すれば油が表面に浮び出るように，動詞句は普通の叙述文体においてはその modus 的要素のために文頭に近い位置を占

めてしまうのである．ところが会話文においては，表現者の主観が強く表面化するため，動詞以外の要素でも，その事柄（dictum）への表現者の関心が，動詞で表さるべき事柄に対する以上に強く働らくとき，その要素は動詞を越えて前に出され，そのことによってこれに大きな modus 的価値が付与されることになるのである．しかしこのような成分をいかに強調しようとしても，本来 modus 的要素そのものである否定辞や疑問辞，強勢辞をも越えて前に出ることはできない．また動詞の中でも modus 的要素を多く含んだ命令形や jussive などの前に出ることも，限られた慣用的表現以外には，見出せないのである．

5．文の複合　ヘブライ語の wə のように並列的と見なされる接続詞によって結合された文が，さらには全く接続詞を介することなく asyndetic に続けられた文が，その前の文の内容を説明したり，制約したりして，いわゆる主文に対する従属文の関係に立つことがあるのは，セム諸語の構文法における著るしい特徴である．意味構造においては密接に関連している事柄が，表層構造では一応別々のものとして切り離されて現れるのである．

ここで一つ問題となるのは，これらを別々のそれぞれ独立した文とすべきか，それとも複文とすべきかということであるが，この識別は古典ヘブライ語の場合原則的には困難である．というのは，文の末尾を文音調によってしるしづけようとするとき，我々のテクストはたしかにマソレット記号という一種の句読点を付けてはいるけれども，これは可成り後代に聖典朗唱の際の音調や段落を示すために付けられたもので，一応は意味の切れ目に対応してはいるけれども，本来のこの言語の姿を反映するものではない．マソレットの句読法によると，節と節との切れ目が一番大きな発音の段落だから，各節が一つの文に該当すると見ることもできるが，そうすると我々の資料にもしばしば見られるとおり，一つの文の中で会話の言葉と地の言葉とがつながっていたり，逆に一つながりの会話の言葉が別々の文

に切り離されるようなことになってしまう．こうして，一つながりの思想のまとまりというような意味面での要因によってごく直観的に——それも他言語の話し手たちの直観によって——文の区切りをつけているのが，現状なのである．こういうわけで，もし以下に取り上げる形式が実際には複文ではなくて単なる文連続であるのならば，我々は複文の意味構造をではなくて，文と文との間の意味関係を論じていることになる．

a．名詞文の接続　最初の文の中で言及された辞項を，その後に続く名詞文が説明したり制約したりする．

wajjeelek 'ijš……, huw' wə'ištow wušəneej baanaajw ≪(直訳) ある人が行った……，彼とその妻とその二人の息子が = a man went…… with his wife and his two sons≫(1：1)

始めの文の主語 'ijš を，後の文で人称代名詞 huw' が受け，これに名詞句を結合して主語を拡張している．最初の動詞は単数形で，後続の句による拡張を予想していない．

wajjiś'uw laahem naašijm moo'abijjowt, šeem haa'aḥat 'orpaah wəšeem haššeenijt ruwt ≪彼らはモアブ女と結婚した，その一人の名はオルパ，もう一人の名はルツ≫（1：4）

この例では二つの文の独立性が強いと思われるが，NEB は≪These two sons married Moabite women, one of whom was called Orpah and the other Ruth≫ と訳している．

madduwa' maaṣa'tij ḥeen bə'eejnejkaa ləhakkijreenij, wə'aanookij nokrijjaah≪どうしてあなたは私に親切にして私を顧みて下さるのですか，そして私は異邦人です→私は異邦人なのに，どうして……≫（2：10）

ここでも主文の主語が wə 以下の名詞文によって限定されている．

b．動詞文の接続

laammaah tiqre'naah lij no'omij, wəjahweh 'aanaah bij wəšaddaj heera' lij ≪(直訳) 何故あなた達は私をナオミと呼ぶのか，そしてヤハウェが私に報復し，全能者が私に災を下した→ヤハウェが私に報復し，全能

者が私に災を下したというのに，何故あなた達は私をナオミと呼ぶのか≫
≪was nennt ihr mich Noomi, *wo doch* Jahwe wider mich Zeugnis abgelegt und der Allmächtige mir Böses getan hat?≫[16]（1：21）

しかし NEB は別々の文として訳出している．

ha'owd lij baanijm bəmee'aj, wəhaajuw laakem la'anaašijm
≪私は胎内にまだ子供を持っているのか，そして彼らがあなた達の夫となる→あなた達の夫となるべき子供がまだ私の胎内にいるだろうか≫（1：11）

この文の場合，文頭の疑問辞 ha- の存在が上のように全体を一つの文としてまとめる役割を果していると思われる．

以上見たのは若干の例に過ぎないが，これらのヘブライ語文を複文と見るにせよ，文連続体と見るにせよ，何れにしてもそれらは順接の形をとっているのに，これを日本語に訳すときには逆接の形をとること，つまり文の位置が入れ換ることに注目したい．一文の構造において見た régressivité の原則がここにも及んでいるのである．

註

（1）日本語の文法については，久野暲『日本文法研究』（東京，1973）と南不二男『現代日本語の構造』（東京，1974）の両著に教えられるところが多かった．

（2）Jacob M. Myers, *The Linguistic and Literary Form of the Book of Ruth*. (Leiden, 1955) p. 8. なおこの書物はルツ記の'syntax'も約6ページにわたって扱っているが，拙論におけるような問題には触れていない．

（3）Sellin-Fohrer, *Einleitung in das Alte Testament*. 11 Aufl. (Heidelberg, 1969) p. 271.

（4）K. Schlesinger, Zur Wortfolge im hebräischen Verbalsatz. *Vetus Testamentum* 3, 1953, pp. 381—390

（5）井筒俊彦「アッカド語の -ma 構文について」『言語研究』4, 1939, pp. 27—68

（6）上掲論文 p. 32

（7）久野暲，上掲書，p. 4以下

（8）英訳はすべて NEB（＝*The New English Bible*. Oxford & Cambridge, 1970）のもの．

(9) consecutivum の wa/wə をも接続詞と見なす.

(10) 動詞のみの一語文も1例として数える.

(11) W. Rudolph, *Das Buch Ruth. Kommentar zum Alten Testament*, XVII 1—3. (Gütersloh, 1962) p. 58

(12) G. Gerleman, *Ruth. Biblischer Kommentar Altes Testament*, XVIII. (Neukirchen, 1965) p. 35

(13) heemmaah は女性を表わすこともあるという (*Gesenius' Hebrew Grammar*, Oxford 1910, § 32n).

(14) halaaheenを古代訳により訂正 (BHK) .

(15) ≪…obwohl ich nicht einmal einer deiner Mägde gleich bin≫ (Rudolph, 上掲書, p. 47)

(16) Rudolph, 上掲書当該箇所.

なお本論で用いたヘブライ語の書法は,印刷の便宜上考えられた独自の 'transliteration' であって, 'phonological transcription' ではない.

(1974, 10, 3)